
幸せの在り方

桃華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの在り方

【Nコード】

N2162D

【作者名】

桃華

【あらすじ】

私が20才の年、祖母が他界した。私の記憶の中の祖母は、田舎者臭く、いつまでも抜けきれない方言を話す人だった。私は、祖母がずっと嫌いだった…。そんな祖母のお葬式の日、一人の上品な女性と出会い。私は、人の愛情や幸せの在り方を知る事になる。

第1話『もらい水』

朝顔に鶴瓶取られてもらい水

まだ、夜も空けきれない早朝：私はけたたましい携帯電話の音で目を覚ました。

何度も何度もしつこく鳴る着メロを、最初は無視していたが鳴り止む様子を見せないの、出た方が早いと、眠たい目を擦りながら電話へと手を掛けた。

『…はい…』

迷惑そうに、小さく応答した。

『もしもし、愛子！お母さんだけど』

何だかとても慌てた様子な母。

『何：？』

私は、そんな母の動揺ぶりにも関わらず冷たく言い放った。

『今から、タクシーで急いで病院に来て！おばあちゃんが危篤なの。』

必死の様子之母をよそに、私は祖母が危篤だと言われても対して、どうとも思わなかった。いや、むしろ心の中で

（やっと、死んだんだ。）と冷ややかに呟いた自分がいた。

『愛子…？』

『分かったよ。じゃあ、すぐ支度したらそっち向かうから』

面倒臭そうに、そう言うつと電話を切った。

祖母が体調を崩して入院をしたのが、私がまだ15才の時だった。それから、何度も入退院を繰り返して、最後に脳溢血で倒れたのが今から2年前だった。

それからほとんど意識がなく、生命維持装置に生かされている日々が続いた。

高校を卒業してすぐ家を出てしまったので、最後に祖母の顔を見たのはもう2年も前になる。

ほんの電車で20分の距離を、私は仕事が忙しいと理由を付けては実家にも寄り付かなかった。

あの家は、家族は私にとって鬼門なのだ…。

簡単に身支度を済ませると、呼んでいたタクシーの中に入り込んだ。

街はまだ、目覚める前の静寂を漂わせている。

私は、まだ薄暗い空を窓越しにただ、ぼんやりと眺めていた。

第1話『もらい水』（後書き）

『もらい水』

朝顔の蔓が、井戸の汲み上げる為の綱に絡みついでいて、その蔓を取ってしまうのがかわいそうだから、隣の家の水を分けてもらいに行く。

そんな、優しい心の人を唄った詩です。

第2話『空蝉』

人の一生には、幸せと不幸が必ず半分づつ訪れる。そう言った人がいた。

あの人は、きちんと幸せを半分受け取ったのだろうか…

病院のベッドの上には、すでに亡骸しか残っていなかった。

私が到着するほんの10分前に、祖母は息を引き取ったらしい。

冷たくなった祖母の手を取り、泣き崩れている母やその母の傍らで声を殺して泣いている父を見ても、私の心が熱くなる事はなかった。それどころか、私は心の中でそんな父と母を冷たく罵った。

（厄介払いが、出来て良かったと思ってるくせに…）と。

だけど、当たり障りなく悲しい顔を作ってみた。後で、冷たい子だとか色々言われたりするのが、面倒だったから…。

久しぶりの実家は、18年過ごした家の筈なのにどうも居心地が悪い。

通夜や葬式の準備で、バタバタと駆けずり回っている父や母を余所に、私は朝早く起こされたツケが回ったのかリビングのソファで、ウトウトしていた。

そんな私に気づいたのか、母が…

『愛子、お通夜は夜からだからまだゆっくりしていいいわよ。お母さんの部屋、まだ布団が敷いてあるから少し眠って来たら？』

私はコクリと頷いて、足早に母の寝室に行った。

布団に入ると、『ハア』と小さく溜め息をついた。

布団からは母の匂いがした。

懐かしいはずの母の匂い、見慣れているはずの天井。
なのに私には、まるで他人の家に來たみたいな感覚だった。
何故かって…？

私は、母に抱かれて眠った記憶がないのだ。

記憶とは、視覚や聴覚や嗅覚といった感覚で覚えているものだと、何かの本に書いてあった。

夜遅くまで、仕事をしていた母と私は顔を合わせる日がない時もあった。

その代わりに、祖母が母の代わりに毎日私の面倒を見てくれた。
本当なら、そんな祖母が死んだんだからもう少し動揺したっていいのだろうが、私は祖母がずっと疎ましかった。

うちは、両親が共働きなのもあってそれなりに裕福な家庭だった。
欲しい物は何でも買って貰えたし、家にいない母達は私にとっても甘かった。

だけど、それとは正反対に祖母はよく怒る人だった。

そして、どこか貧乏臭く、田舎者丸出しの風体には私はいつの頃からか祖母と一緒に歩くのが恥ずかしいと思う様になっていた。

それに、あの方言にはいつもビクビクさせられた。普通の会話でも言葉使いは汚いが、怒ると尚更酷くなる。

私は、今でも祖母の怒鳴り声が耳にハッキリ残っている。

だけど、一番忘れられない事は…。

いつの頃からか、よくお酒を飲む様になった祖母は、酔っている日が多くなっていた…。

いや、まだ小さかった私は酔っていたかどうかは解らなかったが、酒の匂いのする祖母を私はとても嫌いだった。

小さい私は、いつも心の中で何度もこう繰り返した。

（何で、お母さんは家に居てくれないの？友達の家のおばあちゃん
は、優しくくて甘やかしてくれるおばあちゃんばかりなのに、何で

うちのおばあちゃんはこんな人なの…)

みんな、私の事が好きじゃないんだ…！

私の頭の中で、幼かった頃の自分がそう叫んで泣いていた。

久しぶりに家に帰って来たせいか、昔の事が頭の中を駆け巡る。

なんで、この家はこんなに嫌な思い出しかないんだろう……

そんな想いを巡らせているうちに、いつの間にか私は深い眠りについていた。

『……ん……』

バタバタと、沢山の人の足音と話声にふと目が覚めた。

枕元に置いてある携帯を、ゴソゴソと手探りで探した。

(13時20分)

病院を出て家に着いたのが、確か朝の7時…

ソファでウトウトしていた時に確か、テレビの時刻表示が7時4

0分位だったかな。

意外と長い時間眠っていた事に気が付いた。

どうせ何もする事がないから、母が呼びに来るまで布団から出るのは辞めよう…外から聞こえてきているのは、集まった親戚連中だけだろうし、そんな中に居てもつまらない思い出話しか出てこないのだから。

結局また、布団に潜ったわたしを母が呼びに来たのはもう夕方になるうとする時刻だった。

母の用意した喪服に着替えて、集まった親戚連中とつまらない思い出話をして、何事もなく通夜は終わった。

今朝の、祖母の不法の連絡がまるでとても昔の事の様に思える位、

今日1日は長った。

葬式会場の一室に、死んだ人と一夜を過ごす様に用意された部屋の中、数人の親戚と父、母、私、そして亡骸となった祖母が残された。話も尽きて、バタバタと忙しかった両親と、突然の祖母の死に慌てて駆けつけた親戚の人達は、疲れてしまったのかいつの間にか眠っていた。

第2話『空蝉』（後書き）

うつせみ【空蝉】
セミの抜け殻。

第3話『宵越し』

夜の闇は、一体何を隠そうとしているのだろうか……

静かな部屋に、時計秒針の音だけが

（カチツカチツ）と響き渡っている。

この何もない部屋で、暇な時間を持て余している私は窓の外を眺めたり、寝入ってしまった両親達を眺めたりとただ、時間を潰していた。

昼間よく眠ってしまったツケが回って、寝付く事の出来ない自分に少し苛立ちを覚えた。

（こんな事なら、昼間起きていたらよかった…）

まだ夜明けがくるには何時間もあると思うと、何をしていたのか分からなくなる。

ふと、時計を見るとまだ夜の12時。

そりゃ、夜更けにはかわりないがこの位の時間いつもの私なら疲れていない限りまだ、友人達と遊んでいる時間だ。

『ハア…』と重く深い溜め息を漏らすと、下のロビーにあった自動販売機に行こう。と上着を羽織り下へと向かった。

誰もいない静かなロビー、外は真っ暗でだけどロビーは明々と電気が惜しげもなく付いている。

（ジュースにしようかな…それとも、どうせ眠れないんだからビールでも買って行こうか…）

自販機の前で、悩んでいるとロビーの自動ドアがあく機械的な音が耳に入ってきた。

見栄っ張りな両親は、いつもの事ながらこの辺りでも一番有名で大きな葬式会場のここにしていたので、今日だけでも何組もの葬式や通夜があった。

なのでまだ他の家の人達が出入りしているのだろう。

人気のない、だだっ広いロビーは少し薄気味悪いけど、葬式会場には似つかわしくないこの派手やかな内装が、そんな気持ちも吹き飛ばしてくれていた。

自販機のビールのボタンを3回押して、ガタン…ガタンと落ちて来たビールを取ろうとしていたら、コツコツ…と足音がこちらに向かっている事に気が付いた。

（こんな真夜中に、私と同じ様に眠れない人がビールでも買いに来たのだろうか）

まあ、対して気に留める事なくビールを全部取り終えて立ち上がった瞬間…

『あの…』と足音の主に声をかけられた。

私はさすがにびっくりして、振り返った。

そこには、年の頃60才半ば位のとても上品そうな女性が喪服に身を包み立っていた。

『あつ、ごめんなさい。驚かせてしまつて。もしかして…愛子ちゃん？』

私は、この人に何の見覚えもなく

『あつ…はあ。そうですが…』とバカみたいな返事しか出来なかった。

上品そうな女性は、とても優しく微笑み。

『やっぱり。昔の愛子ちゃんのまんまだから、すぐ気づいたわよ。』と言った。

この言葉を私は一体どう受け取ればいいのか、分からないが心の中で（何、この人私がガキっぱいって言いたいのか！）と少しムカッとした。

そんな私の気持ち何て察する事もなく、彼女は私の事を懐かしそう

に見つめた。

しかし、私の方は一向に思い出せない。『こんな夜分に失礼だとは思ったんですけど、おばあ様に合わせて頂けるかしら…？』

本当、明日お葬式が朝からあるんだから何もこんな夜中に来る事はないのだろう…。とは思ったが、親しくしていた者ならすぐに駆けつけたい気持ちも分かる。

私は、誰だか思い出せないその上品な女性を祖母の眠る部屋へと案内する事にした。

寝入っている両親と親戚の人達を起こさない様に、静かに部屋へと入った。

私は小声で

『すみません。両親達、疲れて眠ってしまってます』

彼女小さく、手を横に振って

『いいえ。こちらこそこんな時間に来てしまったから、本当にごめんなさいね。』

と、また小さい声で返事をしてくれた。

祖母の眠る棺の中をしばらく眺めて、手を合わせると私に話しかけて来た。

『愛子ちゃんは、眠れないの？』

私は、小さく『ハハっ』と笑って『うん』と頷いた。

彼女は、少し寂しそうに微笑み

『今日がおばあさんと過ごすの最後だもんね。眠れなくて当然よ。』

私は、（たんに昼間沢山寝てしまったから…）と心で呟き苦笑いを浮かべた。

『…う、ん…』

母がベッドで身じろぎした。

私と彼女は、あっ。と口を手で押さえて目を合わせた。

彼女は、指先をドアの外に向けて

「もう行きますね」と小さく囁いた。

私はコクリと頷いて、部屋の外へと足早に出て行った。

第3話『宵越し』（後書き）

よいごし【宵越し】一夜を越すこと。

第4話『夢枕』

沢山の悲しみを知っている人は、優しい…
ただ、その（優しさ）伝え方を知らないだけなの。

部屋を出た2人は、静かにロビーに向かう。

エレベーターのボタンを押すと、階表示の光をまといながら私達の居る5Fへと近づいてくる。

無言の2人を静寂が包み込んでくる。

『ポーンッ』

エレベーターが来た。

私は、エレベーターのドアを閉まらない様にボタンを押して、彼女を中に促した。

『ありがとう。』

彼女は、そう言う中へ入った。

私も、続いて中へ入る。一階のボタンを押すと、エレベーターは下へと向かって行った。

私は、ふとお客様を迎えたのに、部屋で何のもてなしもしていなかった事に気が付いた。

『あの、私お茶も出さなくてすみません。』

彼女の方を向き、すまなそうに目を伏せると、彼女は優しく微笑んで『気にしないで、こんな時間に来た私が非常識なのだから。』

『そんな事ないです。少なくとも、私は今日は何だか眠れなかったので、来て頂いて嬉しかったです。』

私がそう言うと、彼女は懐かしそうに愛おしそうに、私を見つめた。
『ポーンッ』

エレベーターが一階に着いた。

彼女を先にエレベーターから下ろし、その後に私も続いた。

彼女はロビーの半分位に来た時に、少し後ろを歩く私の方へと振り返った。

『もし、ご迷惑じゃなかったらもう少しお話し出来ないかしら…？』

突然の申し出に少し驚いたけれど、まだ夜明けまで何時間もある。

この静寂の中一人、あの部屋で起きているのも退屈だ。

私は、彼女の申し出を受ける事にした。

『はい。じゃあ、さっきお茶も出せなかったんで、コーヒーでも飲みながらそのソファで話しましょ。』

彼女は微笑み、頷いた。

本当に、この人は何て優しく微笑むのだろう。

私が、祖母に求めたおばちゃん像を实体化したみたいな人だ。

私は心の中で小さく呟いた。

（もし、この人が祖母だったら私は今頃悲しみに明け暮れているのだろうか？）

豪華なロビーの少し中に入った場所にあるソファに、私達は腰掛けた。

『あの、私コーヒー買って来ますね。』そう言うと、近くにある自販機へと向かった。

2つコーヒーを買うと、足早に彼女の元へ戻った。

『どうぞ。』

コーヒーを差し出すと

『どうもありがとう。本当に愛子ちゃんは優しいね。』

とまるで、小さな子供にでも言う様に私に言った。

私は、彼女の隣に腰掛けるとずっと疑問に思っていた事を聞いた。

『あの、祖母とはどういうご関係だったんですか？』

この上品な女性と、うちの祖母とはまるで接点がある様には思えなかった。

彼女は少し悩んだ様な口調で答えた。

『……私は、おばあさんの妹なの……』

『そう何ですか。何人か兄弟や姉妹がいるって、おばあちゃん言うてました。』

私は、彼女が祖母の妹だという事には対して驚きはなかった。確かに、似ても似つかないがこんな年老いて、しかも何年も寝たきりだった人に、他人のしかも友人何かがこんな夜中にわざわざ尋ねてくる訳がないからだ。

ハナから、親戚中の誰かではあるだろ。とは予想が付いていた、しかし、少し腑に落ちないのは……

何で、妹だと言う事をそんなに戸惑いながら言うのだろ。……という所だ。

だけど、まあ何か事情があるのだろう。親戚同士は仲がいい人達も居れば、中々どうして気が合わない人達もいる。

そう思い、気にしない事にした。

取り留めの無い会話を幾つか交わして、買って来たコーヒを半分程飲み終えた頃。

少しの沈黙の後、彼女が突然神妙な顔をして私に言った。

『愛子ちゃん……、もしまだ時間があるのなら、少し昔話をしてもいいかしら……？』

姉である祖母が死んで、感傷的になっているのか、何だか私は彼女がとても寂しそうに思えた。

私は、ロビーにある大きな柱時計目をやった。

まだ1時を少し過ぎたばかりだった。

私は

『はい。私も、まだ眠れないし。おばさんの話、聞きたいです。』
部屋へ帰っても、退屈だからそう言ったのか…
ただ、寂し気なこの人を一人夜の闇の中へ追い返す事がかわいそう
だから、そう言ったのか…。

いつもなら、知らない人との気を使う会話何て、面倒くさいと適当
を言っただけなのに…

まあ、こんな夜だから少しらしくない事をしてしまうのかも……。

……長い夜の、悲しく切ない物語の幕が開いた……

第4話『夢枕』（後書き）

ゆめまくら【夢枕】

夢を見ているときの枕もと。

第5話『秋あかね』

幼い子供が赤子を背負い、泣かないで泣かないでと唄を歌う……子守歌

彼女はコーヒーに少し口をつけると、小さな子供に、昔話を聞かせる様に話し始めた。

『昔はね、今の時代には考えられない様な事が沢山あったの…』

―時は大正―

貧しい田舎のある家に、3番目の赤子がこの世に産声をあげた。初めての女の子だ。

名を『はる江』と名付けられた。

昔は兄弟が5人、6人といっても不思議のない世の中だった。

なぜなら、子供は家の大事な働き手なのだから、人数が多いに越した事はない。

子供が沢山いては、学費や何やでお金が掛かるからと、子供を産まない少子化の今とは、全く逆の考え方なのだ。

この時代、学校に通える子なんてほんの一握りの人間だけだった。

はる江の家は、その貧しい中でも最も貧しい部落の村に住んでいた。幼い頃から家の手伝いは当たり前、ご飯を食べる事もままならない程だったが、一つだけ救いだったのは、忙しい父や母の変わりに面倒を見てくれる兄達は、はる江にとっても優しくかった。

はる江も、次々に生まれてくる下の妹や弟達にとっても優しく接した。

そして、はる江が10才になった時、7番目の子供が生まれた。
名を『あき江』と付けられた。

それが、私だ。

はる江は、兄弟姉妹達の中でもあき江が一番に可愛かった。

あき江も、母変わりのはる江にとてもよく懐いていて、片時もはる江の側から離れるのを嫌がる位だった。

数年の間は、貧しいながらも幸せな日々が続いていた……

しかし、はる江が13才になった時村に天災が訪れてた。

……日照りだ……

何日にも渡って、雨が降らない。

百姓のはる江の家には、僅かの食料もなくなった。

幼い妹達は、お腹を空かせては泣く日々が続いた。

最初に両親がとったのは、父の出稼ぎだった。

しかし、それでは家族みんながこの夏を越す事などできなかった。

百姓意外した事のない父の稼ぎはしれていたからだ。

次に、家を出たのは次男の兄さんだった。

長男は家の大事な跡継ぎなので、家から出す事は出来ない。

何とか、父と兄さんの稼ぎでひと夏を越す事はできた。

しかし、これからが最も過酷な季節に入っていく。

冬は、山菜やキノコなども採れず、出稼ぎに行った父や兄さん達も、収穫の時期の過ぎた他の村から返されてしまうのだ。

本当なら、秋に収穫した食料を蓄えて細々とでも、冬を越さなくては
いけないのだが、収穫のなかった今年はその蓄えがない。

どうしたらいいのか……。

父や母は悩んだ。

悩んで悩んで出た答えは、はる江を『奉公』に出す事だった。

この家で、兄達に変わって働けるのははる江だけだった。

はる江は、3年間という長い間奉公に出される事が決まった。奉公とは、お金持ちの商家の家に行って洗濯や掃除、そしてその家にいる小さい子供達の面倒を見る事だ。

はる江は、近くの街のとても裕福な商家の家に生まれた、まだ赤子の子供の面倒を見る事になった。

話しが決まってから、数日後すぐにはる江は家を出る事になった。

あき江は、出て行くはる江の手を離そうとはしなかった。

最後まではる江にすがりついている。

『もう、行かなくちゃ……』

そう言つてあき江の手を離れた。

あき江は、いつも遊んでいたお手玉をはる江に渡した。

『これ、お姉ちゃんにくれるの?』

まだ、言葉が十分に話せないあき江は、ただコクンと頷いた。

はる江は、優しく笑つてあき江の頭を撫でた。

そして、何度も何度もはる江はみんなの方を振り返りながら、歩いて行った。

みんなの姿が見えなくなるまで……

それは、12月の寒い寒い冬の日の事だった……………。

第5話『秋あかね』（後書き）

『秋あかね』

赤トンボの名前。

秋の夕暮れの、夕日と同じ色のトンボ。

第6話『暁の闇』

明けぬ夜はないのだと……

止まない雨はないのだと……

何度も、心で繰り返し

お天道様を、待っていた。

ふた山程越えた所にある街が、はる江の奉公先だった。

子供の足では、この距離がとてもとても長く感じ、最果ての地まで来たかの様に、はる江は感じた。

着いてすぐに、旦那様と奥様にあいさつをする事になった。

豪華な屋敷の玄関は、見た事がない位立派な造りだった。

はる江の家がすっぽり入ってしまう位の玄関を上がると、これまたピカピカに磨き上げられた床、上等そうな障子がズラリと並んでいた。

一体、何部屋あるのだろうか？ 気を抜くと、迷子になってしまいそうな家だ。

そんな事を思いながら、旦那様達の待つ部屋へ足を進めた。

私をここまで連れて来てくれた、村の村長さんが先に障子越しにあいさつをした。

『大変、遅くなりますた。娘を連れて来ますた。』

村長さんが、方言訛りの言葉でそう言うと、中から奥様らしい人が答えた。

『入り。』

私は、心臓がバクンと鳴った。

（失礼のない様に、失礼のない様に……）
と心の中で何度もくり返した。

『し、失礼します。』

そう言つて、障子をゆっくり開けた。

『中にお入り。』

『は、はい。』

はる江は、ささつと中へ入って行つた。

村長さんは、ペコリとお辞儀をすると障子を静かにしめて、行つてしまつた。

『は、はる江といひます。年は……』

あいさつをしようと必死の私の声を遮る様に、奥様の声が飛んできた。

『そんな事は、聞いていますから早速仕事の説明をさせて貰えるかしら。』

私は、手をつき頭を深く下げて

『す、すみません。よろしく願ひします。』

突然の、予想出来なかつた展開にそれだけを言つので、はる江は精一杯だつた。

しかし、そんなはる江をよそに奥様は、さつさと話しを続けた。

『多少、聞いてはいると思うけどあなたには、先月産まれた私の坊やの面倒を日中は見る事。朝は、朝の準備の手伝い。私が仕事が上がった夕方からは、店の方づけなどをして貰います。もちろん、日中も坊やの面倒を見ながら、洗濯や掃除はしていただきますので……分かりましたか。』

いっぺんに沢山の事を言われて、正直頭の中はゴチャゴチャになつてしまつたが、聞き返す事など許さない。と言つて雰囲気のお様を前に『は、はい。』と返事をするしかなかった。

奥様は、勝ち気な感じのとても美しい人だった。

はる江は老婆の言う事を必死で、覚えた。一部始終話し終えると、老婆は最後に念を押すようにはる江に言った。

『あんたは、自分の命に変えてでも坊ちゃんをお守りするんだよ。この子の命と、あんたの命とでは天と地程の差があるんだからね。まあ、他の事が多少出来なくても目を瞑るが、坊ちゃんの事だけは何かあったら許しはしないからね。』

私は背筋がゾツとした。しかし、ここで役立たずの面を付けられたら、家に帰されてしまう。

私は必死に首を縦に上下させた。

『じゃあ、今日はもう夕時だから坊ちゃん的面倒は明日から始めるとして、今から炊事場に行つて夕飯の手伝いをしておいで。』

きつい物腰で、老婆はそう言つと坊ちゃんの方を向いた。

私は、失礼します。と頭を下げて炊事場へと向かった。

とても豪華な広い家には、暖かさがまるでなかった。
人も家も、とても冷たく感じる……

貧しくても笑顔が堪えなかった、故郷を思い浮かべると、はる江の目から涙が零れた。

きつと、きつとみんなの所に帰るから……

第6話『暁の闇』（後書き）

『暁の闇』

月のない明け方。陰暦で14日ごろまでの明け方。また、そのときの暗さ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2162d/>

幸せの在り方

2010年10月20日19時09分発行